



# みんなので 復興の花を ふくらませよう



花のように見えますが、これじつは綿の実。10月頃実がはじけ白いワタが顔を出します。

仙台空港から北へ約10km。夏空の広がる仙台市若林区荒浜地区は、以前は見渡すかぎり水田の広がる米どころでした。

今、その水田の多くは津波によって海岸の白砂にまわれ、雑草が茂り、倒木があちこちに転がる荒地になっています。そんななか一ヵ所だけ、小さな緑の芽が整然と並ぶ畑があります。

それは、荒浜の生産者 渡辺静男さんの12畝の土地。「東北コットンプロジェクト」の呼びかけで、

綿の試験栽培がスタートした畑です。

7月25日、日本航空株式会社(以下JAL)社長 大西がそこを訪ねました。



JAL社長 大西 賢

## JAL社長畑にて思う

「仙台空港の早期再開と併せて、「東北コットンプロジェクト」は東北復興のシンボルになると思います」。その日の早朝仙台空港から、震災以来途絶えていた定期便の第一便が飛び立ちました。

「綿が塩害の土地に強いことや、空港のすぐ近くの田んぼでこのような試みがなされていることを、知らない方が多いのではないのでしょうか。田んぼの再生、雇用、新しい産業の創出という意義のあるプロジェクトを、広く知ってもらい、関心をもってもらう、そうした領域でJALがお役に立てると大西は考えています。

「渡辺さんにとって棉花は未経験の作物でしようし、また宮城は棉花栽培の北限へのチャレンジでもあると伺いました。その気概に共感します。JALも一緒に挑戦する、



「1.2畝で約0.4トンのワタが収穫できる計算です。Tシャツなら17,000枚くらいになるでしょうか。周りの荒地一面を棉花畑にするのが夢、というコットン博士こと大正紡績の近藤健一さんは、ヨーロッパの有名ブランドからも声のかかる棉花ビジネスの大家。東北コットンプロジェクトの中心的役割を担います。

## コットン博士大いに語る

「JALがいま奮闘している自らの再生にも相通じると、大西は畑の明日を見つめていました。



7月25日の綿の苗。高さは15センチメートルくらい。

「近藤さんとは、祖母の時代からのあつきあいです。ファッションの第一線で活躍する小篠ゆまさんは、コシノヒロコさんのお嬢様。御祖母様の小篠綾子さんより受継ぎオーガニックコットンを広める活動に携わってこられました。小篠さんには、以前機内販売で女性用バッグをデザインしていただいたご縁で、このプロジェクトとJALを結びつけていただきました。「種から育てて、コットンボールの繊維を手で伸ばし、糸を紡ぎ、服に仕立てる。モノ

## コシノ家が橋渡し

「地元の子どもたちと一緒に空港の七夕飾りをつくりたくて、保育園や幼稚園を巡りました。綿摘みなんて、子どもたちもきっと喜ぶと思うな」と竹内(仙台空港勤務)。「みんなで一緒ならきっと大丈夫って、



左から、近藤健一さん(大正紡績)、渡辺静男さん(生産者)、小篠ゆまさん(ユマコシノ アソシエイツ)、大西 賢(JAL)

## JALグループ一丸で

「仙台空港への通勤で眺める水田がともきれいだっただけです。田村(仙台空港勤務)は、風景が変わってしまっただけを寂しがること。空港の係員たちは、定期便の復旧に向け、被災から4ヵ月にわたり、全力を注いできた。ようやく落ち着いて周りに目を向ける余裕が出てきたところだ。

震災の時は合言葉みたいに唱えてきました。この取り組みもみんなで力を合わせれば、きっと大きな実を結ぶと思う」と加藤(仙台空港勤務)。



日本航空仙台空港 旅客グループ 左から、加藤はる美、竹内加奈、田村香菜恵

## 東北コットン TOHOKU COTTON PROJECT

被災地の農業生産組合・農業法人とアパレル関連会社で発足。塩害で稲作のできなくなった農地で、綿の栽培、紡績、商品化、販売を一貫してサポート、「東北コットン」のブランド化を目指すプロジェクトです。  
www.tohokucotton.com

